

「犬と歩行視」 part-1

Part-1 2013年3月16日～31日, Part-2 2013年10月11日～17日

展覧会名称	犬と歩行視 part-1
会期	2013年3月16日(土)～3月31日(日)
開館時間	11:00～19:00(最終入場 18:45 まで)
休館日	月曜日
企画	「犬と歩行視」実行委員会 + 京都市立芸術大学構想設計高橋悟研究室
主催	京都市立芸術大学
助成	「生存の技法 / 医療・芸術・脳科学融合領域」プロジェクト (科学費 MEXT/JSPD24320043)
協力	安藤泰彦、小杉美穂子、中塚裕子、持田明美、池澤茉莉、永田絵里、奥村里菜、牧口千夏、西岡勉、大西雅子、大西治、姜基還
会場	京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA @KCUA2, ギャラリー A, B, C 他
観覧料	無料
お問い合わせ	075-253-1509

「メビウスって抽象的、数学的概念で、数学者が発見したわけだから、八百屋のおっさんはこうは言わんぞってのが僕はあって。」(林剛インタビューより、2012)

犬と共に歩行視すること。それが本展覧会のテーマである。「犬」とは、林剛があみ出した「概念装置」であり、歩行視とは、犬との遭遇への戦術である。1960年代、幾何学的構成に人物フォルムを組み合わせた作品により新進画家として注目された林は、1970年より「いいわ」「犬」など単純な言葉を配置することで人間と世界との関わりを考察するダイナミックな作品を生み出してゆくことになる。詩や文学に於ける「読み・書く」対象としての言葉とは位相の異なる「見る・描く」という作業を基盤にした作品群は、70年代の概念芸術の先駆的な展開として、その後の現代美術の動向へ影響を与える一方で、それらの枠組みの中には収まりきれない、異質な問題意識を内包した異物、未知の世界から送り込まれた隕石のような存在として、今も我々に謎を投げかける力をもっている。本展覧会「犬と歩行視」part-1では、林剛の70年代の作品を中心に紹介すると共に、それらと触発関係にある他の作家の作品を展示することで、改めてその意義と可能性を探る。Part-2(2013年10月11日～11月17日)に於いては、京都市美術館アンデパンダン展を舞台に、中塚裕子との共作で繰り広げられたCourtシリーズに始まる10年にわたる壮大なインスタレーション・プロジェクトの紹介や、それらと関連する多数の資料を展示する予定である。

■ 出展作家

林剛、井上明彦、木村秀樹、黒河和美、倉智敬子、杉山雅之、高橋悟、建畠哲、長野五郎

■ 展覧会関連イベント・トーク

「事故者と犬 — 絵画・言語・身体」

日時: 2013年3月30日(土) 午後1時より(予定)

出演: 林剛(美術家)、木村秀樹(美術家)、高橋悟(美術家)、建畠哲(詩人・美術批評・京都市立芸術大学学長)

特別招待ゲスト(予定) 森村泰昌(美術家)・河本信治(京都国立近代美術館特任研究員)

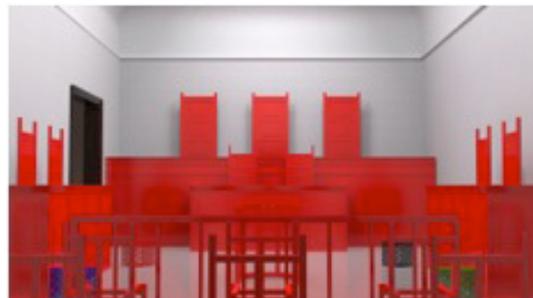
■ 主な展示内容

会場構成としては、林剛氏の看板作品を京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA 内のエレベーター、階段、通路、屋外に星座のように配置し、「歩行」と「視」に関わる異質な時間・空間が立ち上がる経験を探ります。ギャラリー内展示スペースには、文字を使用した作品に加え、初期の絵画、映像作品「犬笑い」、タピストリーの「織り犬」、オブジェの「回転する犬」と参加作家の作品を対時的に展示します。

■ 出展作家紹介

林 剛

1970年より「いいわ」、「犬」など文字を使用し、言葉・概念・世界と視ることの意味を問い直す作品を制作。1982年より中塚裕子と京都アンデパンダン展にて、10年にわたる壮大なインスタレーション・プロジェクトを展開する。京都アンデパンダン展「あやとり」(京都市美術館・ギャラリー16、1982)、京都アンデパンダン展「THE COURT 天女の庭/テニスコート」(1983)、京都アンデパンダン展「THE COURTx1.5 法廷」(1984)、京都アンデパンダン展「THE COURT 天女の裏庭」(1985)、京都アンデパンダン展「COURT から PLANT へ」(1986)、京都アンデパンダン展「on the table [plant/ 大菜]」(1987)、京都アンデパンダン展「in to the drawer」(1988)、京都アンデパンダン展「around the seesaw[plant/ 大菜]」(1989)、京都アンデパンダン展「PENKING 1990 (GREEN to BROWN) - 黄金玉は M 帯をくぐったか -」(1990)、京都アンデパンダン展「1991 PENKING-(天女の接近)ー」(1991)等。



林剛 「八木詩」

井上 明彦

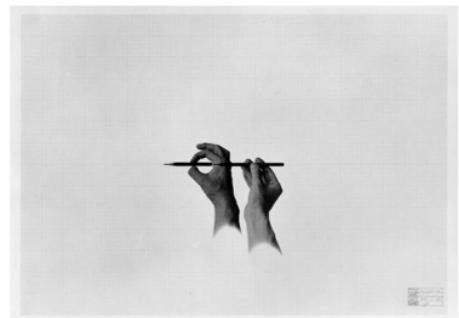
1984年京都大学大学院博士課程中退。1995年より京都市立芸術大学美術学部助教授(造形計画)。2006-07年文化庁新進芸術家在外研修(パリ)・パリ第8大学造形芸術科招聘教授。主な展覧会・プロジェクトに「偶々、2と5」(個展、2012)、「Trouble in Paradise / 生存のエシックス」(京都国立近代美術館、2010)、「八つの課題: 三嶽伊紗+今村源+日下部一司+井上明彦」(ギャラリーヤマゲチ、2007)、「方形の水」(個展、2004)、「新開地アートブックプロジェクト」(2003)、「invisible ear: 椎原保+藤枝守+井上明彦」(CASO、2002)、「大佐町光の記憶」(プロジェクト、2000)、「AGAR-AGAR」(個展、2000)等。



© INOUE Akihiko

木村 秀樹

1974年京都市立芸術大学西洋画科専攻科終了。1988年文化庁派遣在外研修員として米国ペンシルバニア大学美術学部大学院留学、1998年より京都市立芸術大学教授。主な受賞歴に第9回東京国際版画ビエンナーレ 京都国立近代美術館賞(1974)、第8回クラコウ国際版画ビエンナーレ ポーランド写真協会賞(1980)、京都府文化賞 功労賞(2009)。主な展覧会に第9回東京国際版画ビエンナーレ(1974)、第5回英国国際版画ビエンナーレ(1976)、「日本現代版画アメリカ展」21人の版画家展(1980)、今日の作家シリーズ「木村秀樹近作展・・・水鳥は・・・」(個展、大阪府立現代美術センター、1983)、MAXI GRAPHICA(京都市美術館、1988)、ユーロパリアジャパン 現代日本美術展(ベルギー王国ナミュール市立文化センター、1989)、「半透明」(個展、京都市美術館、1999)、写真と美術の対話(東京国立近代美術館フィルムセンター、2000)、第21回京都美術文化賞 受賞記念展(京都文化博物館、2009)等。



© KIMURA Hideki

黒河 和美

2006年京都インターアート美術学校計画クラス卒業。主な展覧会に、黒河一美展(個展、ギャラリー16) 視のaspect「作業/迷路描き」<企画 林剛>(2009)等。



倉智 敬子

京都市立芸術大学大学院美術修士課程修了、コロンビア大学大学院美術修士課程修了。絵画・彫刻・写真・インスタレーションを駆使しナラティブな場の可能性を探求する。主な展覧会に、Chatter Box: ヒトの泣き声(MATSUO MEGUMI + VOICE GALLERY pfs/w、2012)、NOWHERE/Vale of Paradise(チリ、2006)、Devices of Memory(アメリカ、2006)、L to R: Dictionary/Constellation to Mother Tongue(1999)、Mother Tongue(アメリカ、1998)、Name of the Land(アメリカ、1998)、14 SCULPTOR'S GALLERY(アメリカ、1992)、PAINTING AND SCULPTURE(CHUCK LEVITANG GALLERY、アメリカ、1988)、緑色の声(日仏会館、1986)、Father's Garden(Gallery16、1985)、個展(小林画廊、1985)等。



お問い合わせ: 075-253-1509 infokcua@gmail.com

<http://www.kcua.ac.jp/gallery/>

杉山 雅之

1985年京都市立芸術大学大学院修士課程修了。杉山雅之展「歩行視と円筒形」(あさご芸術の森美術館、2013)、野外彫刻半世紀展(北九州市美術館分館、2011)、第10回大分アジア彫刻展入選(朝倉文夫記念館、2010)、UBE ビエンナーレ(2009)、個展「視線の破片」(galrie 16、2007)、個展「空間に溶けゆく視線」(ギャラリーなつか、2007)、個展「その影」(村松画廊、2006)、ビエンナーレ KUMAMOTO(2004/グランプリ受賞)、あさご芸術の森大賞展(大賞受賞、2003) 芸術祭 京(仁和寺、2000) 京都市内の空き地にてインスタレーション(1994)、京都市内の空き地にてインスタレーション(1986)等。



高橋 悟

イェール大学大学院美術修士課程修了。カーネギーメロン大学助教授、ミシガン大学准教授を経て、現在、京都市立芸術大学大学院構想設計・メディアアート教授。CONFLICT(対立)とCOMMONS(共有)、MEDIATION(媒介)とMEDITATION(瞑想)、EVIDENCE BASE(科学的証明)とEXPERIENCE BASE(経験の創出)など対立する諸概念の考察を通して、芸術・医療・生命・環境にかかわる研究・制作を实践する。主な展覧会に Chatter Box: ヒトの泣き声 (MATSUO MEGUMI + VOICE GALLERY pfs/w、2012)、Trouble in Paradise/ 生存のエシックス (京都国立近代美術館、2010)、Trans-Acting / 未来の記譜法 (京都芸術センター、2006)、NOWHERE/Vale of Paradise (チリ)、Trading Views(ドイツ・オランダ、2001)、LtoR: Constellation to Mother tongue(アメリカ合衆国、1999)等。



建畠 哲

早稲田大学文学部仏文科卒業。芸術新潮編集者、国立国際美術館主任研究官、多摩美術大学教授、国立国際美術館館長を経て、現在、京都市立芸術大学学長、詩人・美術評論家。1990年、1993年ヴェニスビエンナーレ日本館コミッショナー、横浜トリエンナーレ・コミッショナー、2010年愛知トリエンナーレ芸術監督。専門は現代美術。詩人としては、1991年に『余白のランナー』で第2回歴程新鋭賞、2005年に『零度の犬』で第35回高見順賞を受賞。

長野 五郎

1975年京都市立芸術大学芸術学部美術専攻科染織専攻修了。成安造形短期大学を経て、大阪成蹊大学芸術学部教授となる。2011年大阪成蹊大学を退職。美術家、染織研究者。世界各地の生活に根ざした染織工芸を野外調査、研究する一方、物・言葉・イメージをキーワードに作品制作し、国際ビエンナーレ、トリエンナーレで発表する。テキスタイルアート分野の国際展において数々の賞を受賞するほか、国際展、グループ展に多数出品。主な展覧会に、個展(ギャラリー16)、個展(ベラクルス州立大学芸術研究所、メキシコ)、個展(M.X.スペース1010、スペイン)等。著書に、「インターテクスチュアリティー視ることの織物 長野五郎1971 - 2011」、「織物の原風景 一樹皮と草皮の布と機」等。

